

縄文からみた弥生の人口

国立民族学博物館
小山 修三



現職： 国立民族学博物館 民族社会研究部 教授

略歴： 1939年,香川県生まれ。1964年,国際基督教大学卒業。1966年から國學院大学大学院で考古学を専攻,1971年,博士課程修了。1971年から1976年までカリフォルニア大学(デイス)大学院,博士号取得。現在,国立民族学博物館教授。

専門： 民族学(オーストラリア・アボリジニ),考古学(縄文時代)

著書： 『縄文時代』(中公新書,1984年),『縄文探検』(中公文庫,1998年),『狩人の大地』(雄山閣出版,1992年),『縄文学への道』(NHKブックス,1996年)

先史時代の人口は発掘資料という間接的なデータによるか、民族誌の記録から引用したパラメータを使って計算する方法しかなく、実数を知りたいへん難しい。しかし、仮説であっても数値としてあらわすことができれば、対象とする社会のあり方をより具体的にイメージできる。日本先史時代の人口は、旧石器時代、縄文時代、弥生以降の3つの異なった波に分けることができる。旧石器時代は、最近の研究の成果によって、日本列島での人類の出現が100万年前までさかのぼる可能性が出てきたが、本格的な動きのわかるのは後期旧石器時代(5,000年前～)からである。この時代は大型獣を主食とし、それを追って移動する寒冷気候に適応した経済であった。しかし、肉食は生態学的に効率が悪く、総エネルギー量が低いので人口量はあまり大きくなり、最大でも1万人を越えることはなかったと考えられる。そして、氷河期が終わり気候が温暖化するとともにその経済も終焉を告げるのである。

縄文時代は、植物を主食とする温暖型の経済であった。植物食のエネルギー量は格段に多く、人口量はそのピーク時には30万人近くまで増える。しかし、その後人口は急激に減少し低迷する。弥生時代になると大陸から、高い生産力をもつ水田稲作技術が伝播して、日本列島の人口は再びその数を増やす。このように食と人口の間には高い相関が認められるが、それは特定区域内の食資源の生産量、厳密にはその時代の生産技術によるcarrying capacity(人口支持力)に深く関わっていることがわかる。

縄文時代の人口は、シミュレーション(小山・杉藤、1984)の結果によると、東日本に分布が集中して複雑な動きをみせるが、西日本の人口は時代を通して少なく、あまり変化がなかった。東日本では当初から人口が急速に増えていったが、約4000年前(中期末)を境に大きな変化が起こる。その原因は気候の寒冷化を引き金としておこった環境劣化のためにcarrying capacityが人口量とぶつかった関東地方の人口爆発だったと考えられる。その結果、地方への流出がはじまるが、はじめはcarrying capacityに余裕のあった周辺

地域に吸収されていた。ところが、その後も爆発がくり返されて列島全体が飽和状態になり、人口の崩壊現象が起こるのである。中期末までの人口伸張期にはクマビエの栽培化やイノシシの家畜化など、新技術の開発が考えられるが、縄文の温暖型食経済は寒冷化の力で乗り越えることができなかったのである。

人口の動きが激しくなる要因として、人口量 - carrying capacity - 人口爆発という視点でみると、縄文時代は三段階にわけることができる。第一は、地域を順調に人が埋めていく安定した時期で、どの地域でも人口許容量に余裕があるので、領域が曖昧で、定着性がよいため、移住がおこっても集団間におおきな摩擦は生まれない。そのため、文化交流がスムーズにおこなわれ同質の文化がひろがる。時期的には草創期から早期にあたり、土器文化圏が広いことによく反映されている。第二は、ある地域で人口爆発が起こり、他の地域への積極的な拡散がおこる段階である。中核地域では領域が明確化して定着性がつよまり、技術改革が起こる可能性が高くなる。文化要素は、人とともに伝播するので、周辺地域では、それを受け入れる。このような右肩あがり状態は、中期から後期にかけての東日本の状況とよく一致している。第三は、全国的に人口量とcarrying capacity が接近して、人口圧が高くなる段階である。その結果、墮胎、間引き、棄老といった内在的な人口抑制行為がおこりやすい。領域はさらに細分化されるが、孤立化して他地域との交渉は低調になる。慢性的な食糧不足におこり、飢饉や流行病などによって急激な人口の減少がおこりやすい。とくに飢饉は江戸末期の社会に明らかにみられるが、縄文時代の後期から晩期にかけての状況はそれを思わせるものがある。

弥生時代の人口は遺跡からの計算では約 60 万となった。ただし、弥生時代の遺跡の重み付けを関東地方の遺跡からとったため、全体量が低くなりすぎたようである。その後の発掘によってわかった、吉野ヶ里遺跡をはじめとする西日本における弥生集落の大きさを考えると、弥生末期には 100 万を越えていたのではないかと考えている。

新しい文化は、早い段階でまず東海地方まで伝わり、やがて関東地方にまで及んだ。人口分布は縄文時代とは逆となり、その立地も山地型から平地型へと変わっている。弥生時代は、各地方にクニが生まれ、朝鮮半島や大陸と密接なコンタクトをもつことで新しい文物をとりこんでいった。やがてクニグニは統一されて日本という国ができあがる。そのような順調な発展は、水田稲作によって支えられたものであった。新技術の受容はまことに有利な条件の中で行われた。なぜなら、海辺や山の立地を舞台とする縄文の生業に対し、それまでほとんどかえりみられなかった平地の湿地帯を生産の場としたので、それまでの生産の場も生かすことができたからである。また、縄文人が農耕をすでに始めていたこともプレ・コンディションとして有利であった。熱帯性のイネという植物を水田で育てる技術によって、日本列島、とくに縄文時代には小さかった西日本の carrying capacity が大きく膨張したためである。

植原和郎氏は、遺跡から計算した人口が縄文末期から弥生時代（さらには奈良時代まで）に移行するときの増加率があまりにも高いことに注目し、新しい見解を提出した（植原、1987）。遺跡数からの計算で使った 0.427% という増加率は、近代以前の社会でもあまり例のない高さであることは、増加は内在的なものではなく、日本列島外からの移住によっておこったと考えたのである。そこで弥生時代のはじまりを BC300 年とし、それから奈良時代までの 1000 年間についてシミュレーションをおこない、最大で 300 万、少なく見積もって

も 100 万という大量な人びとが大陸からやってきたという結果をだした。また、日本人の形質変化についてのシミュレーションをおこない、その検証とした。その結果、縄文的な形質をもつ「古モンゴロイド」のなかに、大陸からきた「新モンゴロイド」が割り込み、拠点となった近畿地方から列島の南北にむかって混血がすすんでいったという日本人二重構造説を出したのである。これをめぐって様々な議論が起こっているが、人口問題を東アジアというより大きな枠でとらえていることと、日本文化の多様性を考えていることから、説得性の高い説であると考ええる。